



増補版 精神科臨床とは何か―「私」のゆくえ―

内海 健 著

春秋社

2024年07月 296頁

本体価格 ¥2,800+税

本書は2005年に刊行された同著者の『精神科臨床とは何か』の増補改訂版で、初版に一定の改変を加え、「精神科臨床のゆくえ」と題された新しい一章を付して編まれたものである。初学者をも意識した書籍であるが、本質に迫る射程の深さ、臨床上の示唆の豊かさは他に類のないもので、まさにいまこそひとりでも多くの精神科医に読んでほしい本である。

精神科臨床は特殊なものである。それは精神という現象の特殊性に由来している。そして、精神現象の特殊性を知ることは精神科臨床の質を大きく向上させる。この当たり前の事実をこれほど丁寧に、しかも臨床との緊密な結びつきのなかでわかりやすく論じた本はない。本書は前半の基礎編と後半の臨床編からなるが、その前半、後半の内容的つながりの緊密さこそ、この著作の最も優れた点であろう。前半で、著者は次のようなことを論じている。「人間の不自然性」「本能の狂い」「欲望の脱線」「脳は自律的に機能できない臓器」「脳はその回路に他人を組み込んでいる」「自己とは創発されたものである」「私はあとから立ち上がる」「自由は近代になって発見されたもの」等々、いずれも現代思想を丁寧に追っていないと把握できない人間精神の特性なのだが、それを現代思想からではなく、日常のエピソードから、さらに臨床現場から、適切な事例を挙げて説き、後半へとつないでいる。

後半では、実際の診察場面、治療の進行などの問題が扱われるが、前半で論じられた精神の特性がわかっているなければ、なるほど精神科臨床などできないではないか、と思わせる記述が豊富に示されている。例えば、「私はあとから立ち上がる」ということを知らなければ、幻聴という統合失調症の体験の迫真性を感知することはできない。統合失

調症の人は、幻聴を聴いているのではなく、意味がまさに先にあり、体験があとから立ち上がるのだ。そのことを知らなければ統合失調症における体験の強度を正確に推量することはできない。

さらに、「他者は絶対的に不可知でありながらなじみある相手である」という矛盾こそ、精神科臨床の基底をつくるものだと言及する。臨床では「わかる」と「わからない」、その両者が分かれ出るところを目がけるのだと、著者の師である土居健郎の言葉「わかることとわからないことが分かれること、何がわからないかをわかることが、すなわちわかることである」を引いて説く。わかるとわからないのその両者の分かれ目に踏みとどまって臨床を行えという指摘は、まさにこの本の白眉だと思う。精神科の臨床では「わかる」と「わからない」のどのあたりに治療者の足を置くかが、きわめて重要なのだ。赤ちゃんが泣いたとき、お母さんがその事態を察知しておっぱいをあげる。そのことによって「僕はお腹がすいていたから泣いていたのだ」ということが事後的に立ち上がる。精神現象における基本的な事後性である。わかるほうに偏れば誤解に、わからないほうに偏れば無視へとつながる、その間にあって「私の創発」を助けること、それが精神科医療の基本なのである。

増補された章で論じられている現在の状況、環境の子宮化、近代的大人の退場と「子供」のゆくえという問題、いわば超自我の機能の不全と児戯化した社会のゆくえについてわれわれがいま考えるべき課題は無数にある。そうした考察に緒をつけるための切り口を多く教えてくれる章である。本書には、50年前の、われわれの世代が精神科医になったころの精神病理学とは明らかに異なる、新たな精神病理学としての着実な進化を読み取ることができる。

医学部教育を受けてきた人に、いま一度精神についてきちんと問いを立て直してもらいたい、これは決して容易なことではない。しかし、著者はそのことに確実に一石を投じている。本書では、精神科の臨床医にとって必須でありながら容易に気づけない内容が次々と語られ、ページを繰ることが実にワクワクとする体験なのだ。

もう一度、くり返そう。いまこそ、ひとりでも多くの精神科医が本書に触れることを願ってやまない。

(鈴木國文)